

長野妙安寺の仏花制作

東 條 さ や か

愛知川町史研究 第1号 別刷

愛知川町教育委員会 町史編さん室

2003年3月

長野妙安寺の仏花制作

東 條 さやか

はじめに

愛知川町大字長野の妙安寺では毎年一〇月に報恩講が営まれている。報恩講というと、数多の餅を積み重ねた花束(けそく)、御斎(おとき)と呼ばれる会食などが事例として報告されている。本稿もこうした特色を報告すべきかと思われるが、今回取り上げるのは莊嚴の一つ、供花である。

仏前に香・灯明・花を供えるのは莊嚴の基本であるが、妙安寺では「仏花」と呼ばれる花を作って供える。この花はいけばなの「立花(りっか)」にあたるが、ここでは仏に供える花として仏花と呼ぶ。

愛知川町は真宗が盛んであり、各集落で報恩講を営む際にはこうした供花を供えるという。近隣の町々も真宗が盛んであることから同様に供えている可能性があるが、供花そのものに関する報告はほとんど見受けられないため、その実態を知ることは難しい。

そこで、本稿では妙安寺の仏花を取り上げて詳細に報告す

ることで、その実態を明らかにしたい。なお、平成一四年には親鸞上人七五〇回遠忌法要が営まれ、「松一色」と呼ばれる特別な仏花が製作されたことから、特にこの仏花について詳細に報告し、通常の報恩講については同じ集落内の大乘寺の事例を参考として報告する。

一 報恩講にみる仏花 大乘寺

報恩講とは、祖師・先師の恩に報いるためにその忌日に行う法要のことであるが、特に真宗の宗祖親鸞に対する報恩講が名高い。本山で営む法要とは別に、各地で末寺や門信徒による報恩講も営まれるが、本山の報恩講にも参加するため、期日を早めて営む場合が多い⁽¹⁾。

滋賀県湖北地域は日本有数の真宗地帯であり、現在も盛んに信仰されている。例えば、長浜の「回り仏」では蓮如御影道中や二十二日講など多くの事例がみられる。特に蓮如御影道中は、蓮如御影が東本願寺から福井県三国町の吉崎御坊まで、行きは琵琶湖西岸を帰りは東岸を通ることから、その信



図1 報恩講の仏花（大乘寺）

仰の範囲の広さがうかがえる⁽²⁾。

湖東地域もまた真宗が盛んであり、湖北の大谷派（東本願寺派）に対して本願寺派の寺院が多い。愛知川町も本願寺派が多く、妙安寺のある長野西には同じく本願寺派の大乗寺もあり、両寺を含めた近隣の五寺の僧が集い、各寺で順番に報恩講を営む。本願寺派の本山（西本願寺）では一月九〜一六日に報恩講を営むが、末寺の報恩講については特定の日はなく、現在は社会状況にあわせて土曜日・日曜日に法要・法話を行う。

この報恩講に供えられる仏花は、門徒が数日かけて製作する。小さく切り落とした松の葉を集めて小枝を作り、中心となる幹に次々と突き刺して本物の松のように作り上げ、その前面や枝の間から菊・ウメモドキなどが姿を覗かせる。製作技法については次節で詳細に報告するが、一見大きめの盆栽の松に見えるほど自然である。これらの仏花は六本製作され、阿弥陀如来、親鸞上人、蓮如上人等に五具足（いっくそく）あるいは三具足（みつくそく）として供えられる（図1）。

大乘寺の仏花は昔から作られていたが、一時期作り手がいなかったため簡単な生花を供えていたところ、二、三年ほど前に当時の仏花を知る人たちによって見事復活している。その際に妙安寺の製作技法を参考していることから、ほぼ同様の作りをもつ。

このような仏花は門徒宅で報恩講を営む際にも立てられる。こちらの報恩講は九月から三月までの間に一日営み、僧侶を呼んで近所の親戚が集まっておつとめをする場合もあれば、

トウヤだけが営む例など様々である。近年こうした報恩講を営む門徒宅は減少している。

一一 遠忌法要にみる仏花 妙安寺

真宗では、親鸞上人と蓮如上人の遠忌法要が五〇年に一度営まれ、妙安寺では平成一四年一〇月二〇日に親鸞上人七五〇回遠忌法要が営まれた。本来は一〇年ほど先であるが、各寺の都合により前後に変動しており、大乘寺では翌年の平成一五年に営む予定である。

通常の報恩講では、前節で報告したように生花を組み合わせた仏花を製作するが、遠忌法要では生花を一切用いず、松だけを用いた「松一色」と呼ばれる仏花を製作する。

妙安寺の仏花は、阿藤康雄氏の指導の下製作される。仏花作りは特定の家や役で固定されておらず、阿藤氏自身も数年前までは先輩の手伝いをしながらその技法を見て学んだという。いわゆる厳密な師弟関係というものは存在せず、今回製作にあたった門徒も「お師匠さん（阿藤氏）に習おう」ということで集まった有志である。

なお、阿藤氏の先祖に、京都の六角堂の池坊でいけばなを学んだ人がおり、阿藤氏自身もいけばなについて造詣が深いことから詳しい話を聞くことができた。以下、同氏への聞き取りや調査をもとに「松一式」の製作について報告する。

松取り

まず、一〇月八日に仏花に必要な松を山へ切りに行く。「松取り」があるが、愛知川町は平地で山がないため、低い所に自生する蒲生郡竜王町まで行く。大きな松の枝を六〇本ほど鋸で切り取り、軽トラックに積み上げて持ち帰る。法要まで一〇日以上あるため、松が枯れてしまわないよう作業時まで妙安寺の池につけたりする。

カイ作り

夜になると門徒が集まり、仏花作りが始まる。まず、松の枝葉を鋸で一本一本小さく切り落とし分ける。切り落とした葉付きの大きめの枝を中心にして（3）、葉を一本少し下げた添えて葉の根元から銅線で巻いて止める。次に、反対側に葉をもう一本つけて左右対称にする。こうして左右交互に葉を三本ずつ計六本をつけて、「カイ」と呼ばれる一本の大きな葉を作る（図2）。すなわち、一旦バラバラに切った枝葉で新たな葉を作り上げる訳であるが、葉の間隔を空けたり左右対称を少しずらすなど自然な枝ぶりになっている。

なお、銅線は光を反射するため、地面に稲藁を敷いて火をつけ、銅線を焼いておくが、稲藁以外では火力が強すぎて黒くなるという。

このカイが仏花作りの基本となるため、大量に作ってコンテナに入れていく。一二、三人もの人が集まっても、すべてのカイを完成するには三晩ほどかかる。

カイつけ

カイができ上がると、用意しておいた幹の枝先につける。幹は花瓶の口に麻縄で縛った藁をつめ、いい枝ぶりの松の幹を檜などの木材に釘で固定したものを突き刺して立てたものである。この幹は毎年新しくしていたが、近年はいい枝ぶりの松を探すのが難しいため、毎年同じものを用いている。

カイをつける時は、その中心となる枝の根元に錐（きり）や電動ドリルで穴をあけ、和釘の一種で両端が尖った「合い釘」を突き刺す。同様に幹にも穴をあけて、合い釘のもう一端をそこに刺し込む（図3）。和釘は四角い断面をもつため、枝が重みで回転したりするのを防ぐとともに、つけた枝を思い通りの方向に向けられる利点がある。

カイ作りの際に葉を銅線で巻きつけるのも、つけた後で葉を上に向けたり広げたりと思い通りにするためであり、様々な工夫がみられる。

一本の仏花に六〇本近くのカイをつけて松を作り上げるが、なるべく自然な枝ぶりになるように、枝の先端などに集中してカイをつけていく。カイは少しずつ大きさが異なるため、つける場所にあった大きさのものを選ぶとともに、全体のバランスがとれるようにつけていく。

カイつけは一人が一本の仏花を担当するが、つける位置が各人の好みによってそれぞれ異なるため、仏花にもその性格が現れていておもしろい。しかし、一対にするものはなるべく左右対称にバランスをあわせなければならぬので、揃えるのが難しい。

すべてのカイをつけ終え、形ができ上がると仕上げにかかるが、ここからが通常の報恩講の仏花と大きく異なるところである。

イロカイ

松を構成するカイとは別に、赤・白・黄・金・銀の五色にカイを染めた「イロカイ」と呼ばれるものがある。かつては膠で溶いたベニガラ（紅殻）で赤く（図4）、トノコ（砥の粉）・イシハイ（石灰）で白く染めたものと、さらに中央（正真）しようしん）につける一本の金色の三色だけであった。報恩講の時は菊を用いることから黄色いカイも欲しかったが、染料がないため作られなかったという。現在は市販のスプレーで五色に染めるが、金・銀は艶出し用のスプレーを吹き付けて接着剤代わりとし、刷毛で金粉・銀粉をつけている。

イロカイはカイと同様に錐等で穴をあけて合い釘で止めるが、「胴」と呼ばれる中央よりやや下の部分につける。すでにカイがたくさんつけられた間につけていくのは大変であるが、できるだけ色のバランスも取れるようにイロカイを配置していく。

この他、柳の枝に小さな枝を挟んで立てる「足」がある。つける高さを自由に調整できるので、高く立てて松の間から顔を出すように配置して、枝ごと色をつけたものを左右に伸ばしたり、幹の根元近くに松ボックリつきの小枝を立てたりする。

最後に幹を立てるのに用いた板が見えないように、大きく

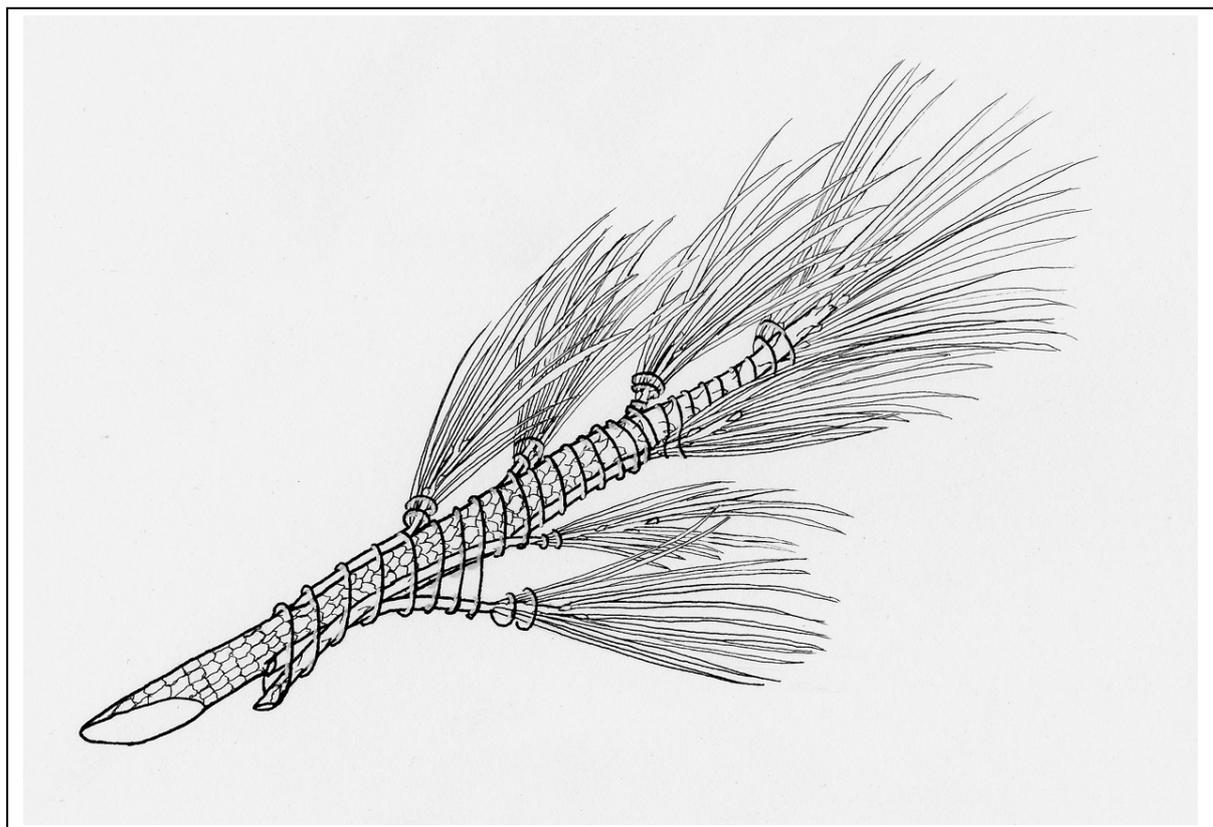


図2 カイ



図3 カイをつける

切った松の表皮を根元に被せて完成である(図5)。なお、葉が乾燥すると色が変わってしまうため、作業中から霧吹きで大量に水をかけておく。

報恩講の仏花では菊などの生花がイロカイにあたるが、こちらはちょうどいい長さに切って土台の藁に直接刺して立てる。また、足にはウメモドキなどを挟んで立てる。

完成した五本の仏花は大乗寺と同様に、阿弥陀如来、親鸞上人、蓮如上人等にそれぞれ供えられる。

さらに、僧侶の控え室となる書院の床の間に一本飾るが、こちらは底が浅く広い鉢を使うため、低くどっしりとした仏花を阿藤氏自らが作る(図6)。この仏花は鉢に白砂を敷くため「砂の物」ともいう。

遠忌法要当日は長野公民館から妙安寺までお練り行列が行われた。一二時には稚児等が公民館に集合して着替えを行い、一三時四〇分に 出発した。行列は門徒が仏旗や会旗(仏教壮年会・仏教婦人会)を持ち、楽人、稚児、八日講、尼講、そして僧侶らが参列し、一四時には妙安寺に到着して法要が営まれた。

現在の遠忌法要は一日であるが、かつては七日間にわたって法要が営まれており、生花では最後までもたずに枯れてしまふことから、イロカイが生み出されてきたのではないかと考えられている。

ところで、この仏花は遠忌法要以外にも立てられることがあった。それは結婚式である。昔は自宅で式を挙げる際に床の間に立てており、式後も挨拶などで親戚をはじめとするお

客が出入りするため、その間二週間近く飾られることもあったという。この仏花の製作は作れる人に依頼しており、阿藤氏も一〇軒ばかり手がけたという。

三 東本願寺の報恩講と仏花

真宗の本山で行われる報恩講は有名であり、特に「西の供物、東の花」と言われるほど、西本願寺の十種の供物そして東本願寺の仏花は豪華なものである。

東本願寺の報恩講の仏花は、大谷祖廟本堂、御影堂、阿弥陀堂にそれぞれ立てられる。その威容は花瓶に比して数倍もの高さをもちながらも、左右に枝を伸ばす広がりをもち、松を中心として菊などの色とりどりの生花を巧みに厚くどっしりと配置する。この仏花は池坊から発達したとされるが、それを裏付ける史料は少なく断片的である。

池坊とは六角堂で知られる頂法寺の坊の名で、一五世紀半ばには巧みに花を立てる寺僧があり、後にたて花の技に優れた池坊専慶を輩出した。続く専応や専栄、不世出の名人といわれた池坊専好(初代・二代目)によりその様式が整備され、安土桃山時代から江戸時代初期にかけて豪壮な立花(りっか)様式が大成される。

東本願寺の仏花はこの立花にあたり、その形式が整えられた一五世紀中期から後期は、たて花の盛行や立花の発達期と重なる。また、日記に「立花」と記されることや、慶長九年(一六〇四)以後約五〇年間、東本願寺の大法要に池坊師弟



図4 イロカイ（膠で着色したもの）



図6 床の間の仏花



図5 完成した仏花

が立花を御影堂に献じるなど、そのつながりは密接であったが⁽⁴⁾、長くは続かなかったようである。

少し時代が遡るが、山科本願寺時代の延徳元年(一四八九)一月に営まれた報恩講に關して、次のような記事が残されている。

一、二十八日 御点心ト御時(齋)ノアヒタニ、五時ヨリ四時半マテ、御式八上様、御念仏御坊様、御莊嚴八五具足、真二ハアヒオヒノ松、菊ミヤマシキヒ、下草ハ水仙花。イツレモ上様ノ御タテ候。

『空善聞書』⁽⁵⁾

この「上様」というのは蓮如上人のことであり、報恩講に際して上人自らが花を立てたという。

この蓮如上人の伝統を受け継ぎ、池坊が立花を献じる重要な法要以外は歴代上人が花を立てていたが、本山の組織が整えられてくると御堂衆が専門に立てるようになる。その後、洛陽法中や伏見坊主衆といった巧者を経て、「花役」の歴代小兵衛を中心とした現在の「花小」一門へと受け継がれている⁽⁶⁾。この間にも池坊の技法が取り入れられた可能性はあるが、現在の東本願寺の仏花は池坊の立華に比べてかなり長大であり、胴も大きいことから独自の発達をとげたといえる。

こうした仏花の形式が整えられたのが東西分派以前であることから、西本願寺でも仏花を立てており、同様に末寺や門徒宅にも立てられるのは当然のことであるかもしれない。しかしながら、その担い手が歴代上人にみるように僧なのか、あるいは妙安寺のように門徒なのかについては、更なる調査

を行う必要がある。

妙安寺の仏花がいつ頃から立てられているかは定かではないが、その技法は代々門徒に受け継がれている。その形式はいけばなの立花を基本としながらも、カイヤイロカイなど通常の解説書にはみられない技法をあわせ持つ。かつては枝ぶりのよい自然の松を組み合わせていたと思われるが、松が少ない地域であることからその入手が難しいため、生み出された工夫と考えられる。こうした技法が他所でもみられるかについては、今後の調査を期したい。

おわりに

仏に対して花を供えることは、莊嚴そして信仰として当然の行為である。しかしながら、あまりにも当然であり自明の理であるがゆえに、その行為そのものが注目を浴びることは少ない。

今回あえてその仏花を取り上げるに至ったのは、門徒が集って仏花を作るといふその行為に深い信仰を見たからである。町内にあまり自生しない松を遠方に求め、さらによりよい姿の仏花を求めて先人が生み出した技法は、今新たな後継者に引き継がれつつある。

こうした仏花は寺のみならず、門徒宅で行う報恩講にも立てられ、さらに結婚式というめでたい場にも立てられていた。信仰という場を離れ、めでたい場に立てる花という新たな認識を獲得した仏花は、人々の生活に密着していたといえる。

註

- (1) 『日本民俗大辞典』(吉川弘文館 一九九九・二〇〇〇)
- (2) 『長浜市史 第六卷 祭りと行事』(長浜市役所 二〇〇二)
- (3) 葉付きの枝ではなく、枝の先端に葉をつけて作る場合もある。
- (4) 仁科和志「仏花の源流とその歴史」(真宗大谷派宗務所式務部監修『東本願寺の仏花』古賀制二 一九八五)
- (5) 真宗大谷派宗務所式務部監修『東本願寺の仏花』古賀制二、一九八五年。同書「報恩講の解説」より転載。
- (6) 註(4)を参照。

付記

今回の調査にあたり、貴重なお話を聞かせていただいた方々、特に阿藤康雄氏、森野久嗣氏には、多大なるご助力を賜りました。この場を借りて深謝申し上げます。